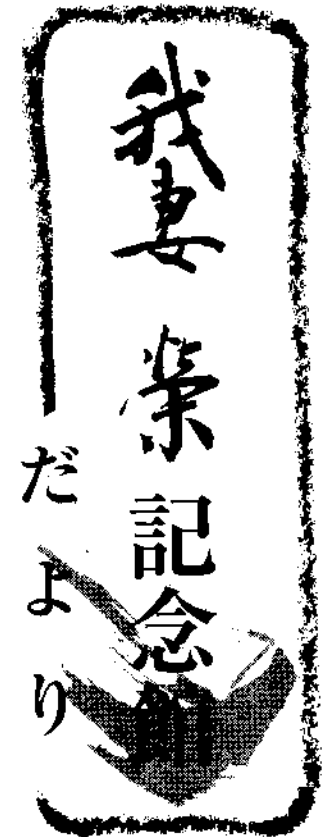




思い出の一枚

我妻榮先生は伯父遠藤茂作元校長先生を敬慕しておられ、伯父さんの勤務先であった荒砥小学校を度々訪問された。緑夫人も父親（鈴木米次郎東洋音楽学校長）が当時荒砥小学校で新進音楽家として講演されたという共通の思い出を持っておられた。

写真左から当時の菊地秀夫町長、安久津久造氏、我妻先生、緑夫人、新野豊松当時の校長。昭和48年9月21日写す。（芳文第190号より）



第 8 号

発行日 / 2006年1月30日

発行 / 我妻榮記念館事務局

☎992-0045

米沢市中央3-4-38

TEL・FAX 0238-24-2211

我妻榮博士と岸信介元首相の友情

館長 今田久夫

米沢出身の我妻榮（一八九七—一九七三）と山口県出身の岸信介（一八九六—一九八七）の出会いは一九一四年、第一高等学校入学時である。共に秀才として学業で競い、その後東京帝国大学法学部に進んだ後も首席を争った間柄である。他方、強い絆で結ばれた生涯の友人であった。

我妻榮は夏休みには岸信介を米沢に招いてフナ釣りをしたり、白布温泉を逍遙している。岸は一を聞いて十を知るタイプ、我妻はレンガを積み重ねる努力型と評されるが、一九二〇年大学卒業後、二人の人生航路は大きく分れた。我妻は大学に残って、終生民法研究一筋の道を進み、岸は農商務省の官僚となり満州国官吏を経て東條英樹内閣の商工大臣になっている。敗戦後、岸は公職を追放されたが、一九五二年解除後は政界に入り、一九五七年総理大臣に就任。しかし一九六〇年新安保条約発効後総理大臣を辞任している。

我妻榮は敗戦直後、A級戦犯

嫌疑者として刑務所に収容された岸信介の釈放を嘆願している。さらに安保斗争の最中、朝日新聞に「岸信介君に与える」の一文をよせて、直ちに政界を退いて、しばらく魚釣りに日々を送ることで、と総理大臣を呼びかけている。

思うに、我妻榮は苦境にある親友への同情からばかりでなく、岸信介に再び日本の政治の方向を誤らせたくないとの深謀からであった。

最近、知人から戴いた『台湾は台湾人の国』の中で次のようなエピソードを知った。この本の著者である許世楷氏（我妻榮監修の『日本政治裁判史録』の執筆者、現在台北駐日経済文化代表処代表）が一九六九年台湾独立を推進しているとして、日本から強制退去されようとしたのを、当時法務省特別顧問であった我妻榮が岸信介に協力を求めて滞在許可の承認を得たというものである。

我妻榮の弟子を愛する心と岸信介との変らない友情を物語るエピソードといえよう。



我妻榮氏と荒砥 その2

元荒砥小学校長 新野 豊松

湯河原からの書簡

昭和四十六年二月一日付我妻先生から書簡をいただいた。発信地は神奈川県湯河原町となっていた。文中に『昨年暮から当地に参りまずまずの健康状態で越年しました。当地は、すこぶる暖かく、水仙と早咲の梅は終り本当の梅が三分通りの花をつけています。あまり暖かいので用件があつて東京に出ますと、トタンに腰が動かなくなり閉口します。二月の末頃まで当地を本拠にしたいと思いますが、法制審議会などが二月中旬から活発になりますのでその頃は引き

揚げることになるかもしれませぬ。』と記されていた。先生は東京都練馬区石神井町の御自宅と共に、避暑避寒その他折にふれこ湯河原の別荘において、生涯、研究執筆活動を続けられたのであった。東京大学教授退官後は真に止むを得ない専門委員と顧問の他一切の公職を離れて、著述に専念することを旨としたものの、その止むを得ない専門委員と顧問が時の経過と共に加わるのであった。之は民法学者の第一人者に対する社会的要請が生涯を通じて強かったこと、然もいったん引請けられた後の責任感の強さが伝わる思いであった。この書簡は先生が逝去なされた二年七ヶ月前に記されたものであるが晩年における御生涯の姿を垣間見る思いである。

荒砥小学校児童へ図書贈らる

この書簡の中で『伯父を記念して児童読みものを寄贈しようとして存じまして唯今岩波書店に命じております。時がかかると思いますがお含みおき下さい。』と記されていた。伯父遠藤茂作氏は荒砥小学校第十代の校長であった。我妻榮氏と縁夫人は結婚に当りこの伯父に心配になったこと



を忘れられず、伯父の勤めた荒砥小学校を訪ねて下さった。このことが御縁になって、児童へ図書を御寄贈下さるとは何と云う勿体ないことであろうか。

石神井町の私邸を訪ねる

我妻文庫設立後一年半を経過した昭和四十七年十一月、子どもたちの喜びを伝えるべく練馬区石神井町の私邸を訪ねた。緑に包まれた閑静な中に建てられた御住宅、その中の書齋に通された。先生御夫妻の歓迎をいただいた。「子どものうちに良書に親しむ習慣をつけたいものである」と御自身の体験も加えて熱く述べられた先生の御姿が今でも目に浮かんでくる。荒砥小学校校長名の感謝状をそ

れこそおそろおそろ出したところ「之はありがたい。之はありがたいことだ。」と何回もおっしゃってお受け頂いた時はホッとすする思いであった。縁夫人と共にほのぼのと語られた結婚の経緯さては荒砥の鮎料理への追憶等！この時私は民法の権威者としての学究的情熱と共に、まことに庶民的な暖い御人柄に強く引かれた。

対面の喜び

昭和四十八年九月二十一日この日は我妻榮先生夫妻が荒砥小学校を訪ねられ、職員児童に對面の喜びを満喫させてくださった忘れがたい日であった。御夫妻が当校を訪問なさったのは之が二回目である。然し始めて訪ねて下さった昭和四十五年十月十八日には伯父に当る遠藤茂作氏がかつて当校第十代校長であったことの故をもつて突然の御訪ねであったこと、然もあいにくの日曜であった為筆者自身もお会いができなかった。にもかかわらずこのことが御縁になって以後先生は生涯を通じて荒砥の地に思いを至され、物心両面にわたり多大の恩恵を与えてくださった。その先生に直接お会いできる日がやってくる。

丁度二日前の九月十九日には母校である米沢興讓館高等学校の創立記念式に臨席なされたとのことで同校校長の大井魁氏が案内役を勤めて下さった。

伯父への敬意

校舎を一巡する中歴代校長の写真で遠藤茂作氏の前にたつた時そして同氏が植えられた『もみの木』の前に立つ時は御夫妻共々特に感慨ひとしおの御様子であった。幸いにもこの日遠藤茂作校長在任当時の児童であった葛浦の安久津久造さん(当時七十八才)が子どもの目に写った同校長の姿やもみの木の由来について直接語ったことには耳を傾け、いたく満足なされた御様子であった。それにしても我妻先生御夫妻が結婚の時にさかのぼる伯父に對する思い出を共有する中で敬慕の念ひとしおなものがあつたように思う。



白鷹町立荒砥小学校 「我妻榮文庫」を訪問して

運営委員 小林 由紀子

師走に入った十二月六日、小園事務局長と梅津さん、小林の三人は白鷹町立荒砥小学校へ向かいました。米沢は、例年になく早い大雪で、私達三人は長靴といういでたちでしたが、めさず白鷹町は雪がなくなるとなく気恥ずかしい思いでした。しかしよく見ると日陰の軒先に少し残っており、ホットして車を降りました。

一、玄関前で

昼食後の昼下がり、荒砥小の校庭では元氣よくドッジボールをする児童達の声で賑わっていました。私達に気づいた五・六人が、元氣よく挨拶してくれましたし、三階建ての校舎を見上げると、二階中央に桜の花びらに囲まれた「琢」の文字が目立つ校章が輝いていました。「地域との心をつなぐこんにちは」という標語や「交通安全運動無事故六〇〇日」という看板も掲げられ、整備された花壇とともに、とても印象的でした。

三、「琢磨学校」の顔が光る校長室で（從四位佐々木高行書）

予ねてのお話通り竹田寛治校長先生は出張中なので、鈴木正人教頭先生にお話を伺いました。先生は荒砥小が創立百三十四年の学校であること、明治四十年

二、玄関をいって校長室へ

ドアを開けたところ、「ようこそおいで下さいました我妻榮記念館の皆様」と書かれた案内板と三足のスリッパが準備されてありました。事務室に挨拶すると事務の方が二階の校長室まで案内して下さり教頭先生に取りついで下さいました。



制定の校訓が「切磋琢磨して児童を鍛えること」であること、二十年程前に新校舎を建設し平成十年には十下小と統合し、現在児童数二百十四名であること等を教えて下さいました。

そして、学校沿革誌の昭和四十五年度の記載から「当校第十代校長、故遠藤茂作氏の甥にあたる東京大学名誉教授、我妻榮氏より、図書並びに図書棚（二十万円相当）の寄贈があり」と

との記録コピーを拝見させて頂きました。これは、当時の校長であられた新野豊松先生の筆耕であり、昭和四十五年十月十八日、我妻榮氏と緑夫人が荒砥小学校を訪問なされた後に、四十六年春まで二百六十四冊贈られたとの記録でありました。

遠藤茂作校長先生は我妻榮先生の父君又次郎先生の兄で、明治三十四年から三十九年まで荒砥小学校長を、その後転じて四十年まで長井小に在任された方でありました。また、緑夫人の父君、鈴木米次郎氏は緑さんの結婚当時東洋音楽学校長であり、その昔、新進音楽家として荒砥小で講演なされたことがある等お二人にとって伯父君への敬愛の念とともに荒砥小へは共通の想い出があったのでした。



四、図書室で寄贈本を手にして

図書室には「我妻榮文庫」と書かれた五十センチ程の白いプレートと先生の寄贈なされた本が三十数冊準備されてあった。その一冊、一冊の裏表紙には先生直筆の次の様な用紙が貼り付けてあり、子ども達の教育や荒砥に寄せる格別の想い・真心が伝わってきて、とても感慨深かったです。

寄贈 昭和四十六年春
荒砥小学校第四代校長 伯父
遠藤 茂作
を記念して
甥 我妻 榮

れてあり、先生の想いを受けて多くの子ども達に愛読された様子が伺えました。

ちなみに荒砥小学校では歴史的に全校読書活動が盛んな学校とのことで、現在も朝読書が続けられているとのことでした。

図書室を後にした後、広い二階中央廊下に掲額してある歴代校長先生の写真を拝見しました。遠藤茂作校長先生は四人目に掲げられておりましたので、昭和四十五年突如訪問して肖像写真を撮られた榮先生は、四代校長と勘違いなされたのではないのでしょうか。ちなみに遠藤茂作校長先生は、一八六一年米沢市北寺町出身の方であります。

終わりに

明るく元氣な子ども達や親切丁寧、爽やかな教職員の皆様にお会いでき、実に楽しいひと時でありました。

また、何よりも寄贈の事実と実物の一部をきちんと再確認できましたし、その本を一冊一冊手にとって先生の真心を感じる事ができ、本当に有意義な荒砥小学校訪問になりました。

なお当時、我妻榮先生から、新野豊松校長先生に宛てられた書簡は、我妻榮記念館に展示されてありますのでぜひともご覧戴きたいと思っております。

三十数冊の本は

- ◎ 「岩波少年少女の本」
- ◎ 「岩波の愛蔵版三十四」
- ◎ 「人間の歴史」

◎ 「標準現色図鑑全集」

◎ 「岩波おはなしの本」等でありました。貸し出しカードにはびっしり児童の名前が記入さ

我妻榮記念館所蔵

海外渡航関連資料から

高橋 良彰 (山形大学人文学助教授)

親孝行の為に購入

我妻先生は、一九二三年から二五年にかけての米欧留学をはじめ、九度に渉る海外渡航を経験している。その訪問先を整理してみると、先生が訪れた国として、米国が多いことに気づかされる。そもそも、先生が初めて訪れた留学の地は米国であり、予定ではその後英国で研究を続ける筈であったという。我妻法学は、「独法学を基礎に」と言われることも多いが、独国ではなくなぜ米・英を留学先として選んだのだろうか。そして、先生にとって米国とはどんな国だったのだろうか。

そんなことを考えながら、唄孝一先生に我妻先生の留学先に関する疑問を尋ねてみると、末弘先生の影響が大きかったのだと、親孝行の為に購入。トラ

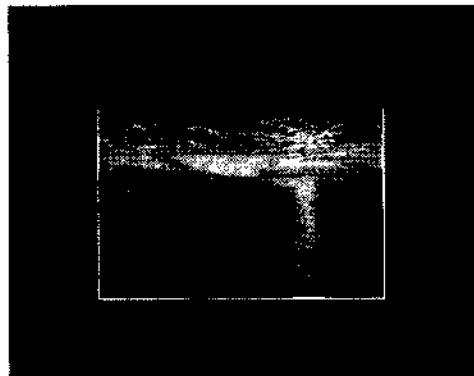
は、という答えが返ってきた。確かに、その可能性は大きい。独法学流の、緻密ではあるが硬直した概念法学に対する批判を行ったのが末弘巖太郎であり、末弘が導入した判例研究は、その後の我妻法学にも受け継がれているからである。米国に対する我妻先生の興味関心は、末弘先生によって植え付けられたものでは、と考えることは間違いではないだろう。

ところで、その後、整理した記念館の資料を見直しながら、ふっとある思いが頭をよぎることとなる。記念館には、我妻先生が初めて留学された時に購入した絵画帖が残されている。そこには、「サンフランシスコを

発してシカゴに向かふ。汽車の関心がなければ、彼の地に向かうということもなかったであろう。しかし、船による長旅の

のである。

学者としての我妻榮について、父親が英語の教師だったから留学先を英米に選んだのではないかと述べることは失礼にあたるかもしれない。また、学問上の関心がなければ、彼の地に向かうということもなかったであろう。しかし、船による長旅の



(絵画帖表紙)

ンクにつめてシカゴに来る。」と記されていた。両親用のおみやげと言うことになるが、先生のお父さんが米沢中学の英語の教員であったことに思い至った

末、初めて降り立った異国の地で、子供の頃から耳にしていた英語に触れながら、この地を父親にも見せたいという思いに駆られたことは確かであろう。同志社に学んだ父にとっても、米国は新島襄ゆかり地であったはずである。

もつとも、このような推測を軽々しく行うべきではない。当時の法学の状況など、客観的な資料を積み上げていくのが研究者としての責務だからだ。しかし、記念館所蔵の絵画帖を見ながら、あながち全くの的はずれとも言えないような思いに駆られたことも確かである。ある一人の人物について、その個人的な思いが行動を決定することはままあることである。人間我妻に、そのような思いがなかった、と言い切れる自信はないからである。

我妻榮先生を偲ぶ会

平成十七年十月三十一日記念館の運営委員会を開催したあとに、先生を偲ぶ会を行いました。この日は丁度先生のご命日でもありました。

今田館長から新しい情報の提供があり(巻頭言参照)、先生の人権上の新たなエピソードが増えたと喜んだところでした。

サンフランシスコを
一舟五十五セント、親行孝一先生の
シカゴに来る。セバスターは
筆を擡いで註を書き

(絵画帖の表紙裏に書いた自筆)

開館日のご案内

金曜日、日曜日、月曜日を
開館日とします。
開館時間帯は
金曜日、日曜日が午後1時
から4時まで
月曜日が午前10時から午後
4時までです。

その他の曜日にご希望の場合は、開館日にご連絡ください。出来るだけご要望に応じるようしております。

入館料 無料

